

## [巻頭特集]

# くらし再発見



# 挑戦するって

# 楽しい

巻頭特集では、  
多忙な生活の中でふと忘れがちだけれど  
大切なことをテーマとした、  
「くらし再発見」シリーズをお届けします。  
創刊号では「挑戦」をテーマに、  
新しい自分、新しい世界へ挑戦することの  
「楽しさ」を追ってみました。

ロボットコンテストに挑戦する学生チーム、フラダンス教室の経営に挑戦する女性、  
姫路城の模型作りに挑戦する男性、女性初のエベレスト登頂を果たした田部井さんなどが登場。

## 目次



### 3 ■巻頭特集 くらし再発見

挑戦するって楽しい

「得られるのは、前を向いて歩んでいる実感」

### 10 ■連載 江戸のくらしと金銭観 一第1回—

江戸時代の通貨と物価の変動

「三つの異なる貨幣を使い分けた江戸庶民」

江戸東京博物館館長 竹内 誠



### 13 ■そこが知りたい! くらしの金融知識

家計の見直し4つのポイント

「家計も小さな会社と同じです」

家計の見直し相談センター・ファイナンシャルプランナー 藤川 太

### 18 ■将来へのまなざし

「お客様に喜んでもらえるのが何よりも嬉しい」

しながわ水族館 水族館飼育員 上田 睦



### 20 ■知るぼると最前線

『金融教育プログラム』を携えて全国行脚

### 24 ■金融教育の現場レポート

買い物体験学習等を通じた金融教育

東京都中央区立阪本小学校



### 28 ■趣味の散歩道～生活いきいき～

俳句

「生活の中で感じたままを  
表現しています」

俳人 河内 静魚

### 30 ■知るぼるとラウンジ

都道府県金融広報委員会の活動紹介  
金融広報アドバイザー紹介

### 33 ■金融広報だより

「金融に関する消費者教育フォーラム」の開催

### 34 ■会長寄稿「創刊によせて」

皆様の声をお寄せください  
編集後記

### 35 ■知るぼるとミュージアム

ポスターが語る昭和のくらし

表紙イラスト・題字 矢田 勝美

# 「挑戦する」という言葉には何かしらワクワク感がある。

日々のくらしが穏やかで満足していれば、特に変化を求めず、今のままであってほしい、と人は考えるのではないのでしょうか。まして今のくらしを変えて何かに挑戦するって、「たいへんそうだな」と思う人は多いでしょう。でも「挑戦する」という言葉には、何かしらワクワク、ドキドキする感じが溢れています。

挑戦する人といえは、新記録を目指すアスリート、宇宙のなぞに迫る科学者、企業の経営者……。しかし挑戦する人は、そういう特別な人々だけではありません。私たちの身近にも、「これをやってみよう!」と念発起する人がたくさんいます。

身近なくらしの中にある挑戦。これからご紹介する人たちの「身近な挑戦」から、私たちは何か大切なことを学べるかもしれません。

から「このロボットは止めよう」と言われる始末。松本さん、ファイトを掻き立て、「いや後二百だけ待ってください」と大学に泊り込みました。そして、ぎりぎりの段階でロボットがいきなり動き出しました。「その瞬間、やったあと叫んだほど。機械に命を吹き込んだ経験は忘れられません」今年の大学ロボコンでは、ロボット同士が通信して情報交換するなど、新しい技術に挑戦しています。「先輩たちが残してくれたものがあるから、新しいことに挑戦できる。僕らも何か上乗せして大学を去りたい」再びの優勝を目指して、松本さんたちの挑戦は続きます。



## レポート・身近な挑戦者たち



優勝を目指して新しいロボットづくりに挑戦!

### はじめはロボットの解体から

東京農工大学三年生の松本拓巳<sup>たくみ</sup>さんはロボット研究会会長。中学時代からロボットに関心を持っていて、大学入学後、さっそく同研究会に入会しました。初めは先輩が作ったロボットを解体し、どんな機構で動くのか、その仕組みから勉強しました。

### 登山もプロセスが楽しい

田部井 淳子



私の登山初体験は小学四年のときで、茶臼岳という山に登りました。この山は火山のため草木が生えない裸の山で、緑に囲まれた私の故郷の山とは大きく異なっていました。また、見るもの、触れるもの初めてのものばかりで、教科書や黒板からは学べない、日常とは別の世界があるという事実に、素直に感動したものです。大人になり、各国の山に登るようになりましたが、その原動力は、当時から変わらず持ち続けている別世界への憧れ、好奇心だったと思います。

確かに、山に登ることは、苦勞の連続です。高度が上がると一歩、一歩の歩みさえ苦しく、どうしてこんな苦勞をしなければならぬのかとの思いが横切ることもあります。しかし、山頂からの美しい風景を目にしたとき、やっぱり登ってよかったと体全体で感じるのです。こればかりは、実際に登った人でないと、分からないと思います。また、ふもとの地域の風物、文化、人々との交流を通じて、地球の大きさ、広さに

最初の挑戦は一年生の六月、知能ロボット大会への出場でした。「ロボットづくりに初めて挑戦したとき、ついに、テレビのロボコンで見ていた人たちの仲間入りしたという感動を忘れられませんでした。見たこともなかった工作機械に囲まれば、新鮮な体験の毎日で、ワクワク感がいっぱいでした」

その一年後である二〇〇六年、東京農工大学は大学生が日ごろの勉強の成果でもある手づくりロボットの性能を競う大会「大学ロボコン」で優勝しました。同大会のロボット研究会が発足して十三年目、初めて念願の優勝の栄冠を手にしたのです。

### 動き出したロボットに快哉

優勝の後、東京農工大チームは、国際大会に出場しました。世界の檜舞台です。チームはやる気満々。戦力増強でロボットを一台追加しようということになり、松本さんがプログラムを担当。ところが試走する段階で動かないのです。いくらプログラムを調整しても動かない。とうとう先輩



### 挑戦について語る①

改めて驚き、別の地域にも行きたい、別の山にも登りたいと思うようになるのです。登山というと、山に登る行為ばかりが注目されますが、実際、それは全体の一部ではないというのも事実です。事前の準備など、人の目に触れないことも重要です。実のところ、山に登るため、成田空港を出発するときには、すでに登山の八〇％は終わっているといついでいいでしょう。

私がエベレストに登ったのは、一九七五年のことでしたが、ネパール政府に申請書を出してから、四年以上が経過していました。その間、協力者や資金集めに奔走しました。また、当時、多くの人から不可能な試みとレッテルを貼られたものでしたが、チームの仲間と、どうしたら不可能を可能にできるか、準備・計画に力を尽くしました。成功の影には、そんな努力がありました。

私は何よりもこのような努力、プロセスを重視しています。プロセスこそを楽しむことが重要だと思うのです。今、私は環境問題に取り組んでいます。この息の長い取り組みが必要です。プロセスを一つひとつ経ながら、地道に活動を続けていきたいです。(談)

●たべいじゅんこ●登山家。一九三九年生まれ。一九七五年世界最高峰エベレストに女性世界初の登頂に成功。一九九二年女性で世界初の七大陸最高峰登頂者。著書に『山を楽しむ』など多数。



**農業は毎日が  
変化の連続。  
だから面白い！**

## 脱サラで農業へ

加藤秀明さんは二十六歳。IT関係の会社で、関わっていたプロジェクトが頓挫。これを機に農業で自立することを決心しました。愛知県の実家がかつて祖父が兼業農家をしており、農地も少しは残っていたからです。当時の貯金は百万円ばかり。しかし知識がゼロだった加藤さん、ある会社の就農支援研修制度を利用し秋田県の大潟村の研修に参加。研修期間は四月から十二月まで。ここでは米作の研修が主体で、農家の方の指導で、種まき、田植え、収穫、乾燥、袋詰めなどを体験しました。研修が終わりに、今年の一月、愛知県の

方が、現存する詳細な絵図面をわざわざ持ってきてくれました。貴重な資料で、小躍りしましたよ」

しかし当初考えていなかった壁が次々と現れました。まず図面の引き方がわからない。失敗の連続で、書いては消し、消しては書く。でもひるむ気持ちは全く生まれない。失敗の連続で、書いては消し、消しては書く、と言います。細部の疑問点はすぐに研究センターに電話したり、姫路に足を運んだり。

城の石垣などをどんな材質で作るか。一苦労。たとえば屋根瓦。粘土を焼いて作ろうと瓦屋さんに相談すると、「こんな薄いもの(十五匁)を焼いたらすぐに割れる」と言われて断念。結局、強化プラスチックを使うことに。

製作の途中で「幻の千姫御殿」(西の丸)の古文書が発見されました。現存する資料をもとにある程度の詳しさを作ろうとしていたところでしたが、これによってより正確な模型をつくることが出来ました。

## 少年の夢を達成した嬉しき

こうして自宅の庭(約一七〇㎡)に現物の二十三分の一のスケールで姫路城の模型が完成したのは二〇〇七年四月。天

実家で本格的に農業に挑戦となりました。

## 芽が出るかどうかでドキドキ

農地は、実家の土地プラス借地で一町二反(約一一八〇㎡)。ほとんどは水田。本格的な農作業は春三月になってから。それまでの期間、加藤さんは積極的に関係づくりに当てました。

「経験豊かな人に教えてもらわなくては農業はできない。農家や農協、役所、あらゆるところに飛び込みました。だれもが懇切に教えてくれました」

農家の方に教えてもらうときには、農作業を手伝うことによってお礼をしなから、学んだと言います。

「農業は想像以上に変化があつて面白い。芽が出るかどうかだけでもドキドキ体験です。肥料の与え方一つで変わります。毎日、作物と一緒に成長できる実感が楽しいですね」

目標は三年後、一千万円の売り上げ。「この挑戦で失敗は考えない。どれだけ努力するかだけです。成功するまで挑戦します」

真夏、今日も加藤さんは水田の雑草取りに余念がありません。

守閣までの高さは四・五mもある堂々たる城郭です。基礎工事もおつうの家を建てるのと同じ。鉄筋鉄骨で、すべてボルトで固定してあります。

城内には妻の郁子さんが焼いた陶作品(武士や馬の置物)が並べられています。かかった費用は、材料費だけでも約一千八百万円。

「製作期間は十八年と三ヶ月。完走できたのは家族の協力と少年のころに受けた感動の強さでしょうね。夢に見ていた挑戦が終わったとき、嬉しいとか感慨無量とかよりも、正直ホッとしました。いまようやく嬉しい気持ちがいじわと……」

早くも名所となった模型に、連日、多くの取材や見学の人が訪れています。

## まず母が挑戦者。 会社にも勤めながら 母の後を追う日々。



## 22年の努力! ついに完成させた 姫路城の正確な模型。



## 姫路城の美しさに感動!

「美しいな!」——少年雑誌に載っていた姫路城の写真。三重県・井村裕保さん(六九歳)の壮大な挑戦は、中学生のときに味わった感動が原動力になりました。付録の天守閣の組み立て模型を井村少年は夢中で作りました。

「そのときに、大きくなったらもっと大きな模型を作ろうと決めたのです」

少年時代の夢を果たすことに着手したのは二十二年前。姫路城の図面など資料を集めると同時に、模型を建てる最適な条件の土地を探しました。

「城郭の資料は日本城郭研究センターの

## これほど楽しいものはない!

四十代になったばかりの会社員大内悦子さんが、フラダンスに出合ったのは大学生のころ。フラダンス(フラはハワイ語で『踊る』の意)に関心を持った母親が、本場で本格的に勉強したいとハワイ行きを決めた際、随行したのがきっかけでした。二十数年前の当時、日本ではフラダンスはまだ知る人ぞ知る程度の認識。二人はハワイのホテルの電話帳と地図で教室を探し、入門を果たしたとのこと。

「本場ハワイアンの音楽に触れて、こんなに楽しいものかと、一度でのめり込みました。文字を持たず、歌で知恵や伝統を歌で伝えてきたハワイでは、一つの歌詩に込められた意味など、文化的にも歴史的にも奥が深いんです」

母親はこれ以降、年に三回(一度の滞在が二週間)のベースでハワイに出かけることになりました。母親にとってそれは趣味の領域を超え、フラダンス教室を開こうという夢になつていきました。ハワイのクム(ハワイ語で「師匠」)から教室を開く許可が出たのは五年後。会社勤めをしていた大内さんも母のサポートをするようになりました。



## 心の支えにもなる稽古事

知り合い七、八名を自宅に呼んでスタートしましたが、徐々に入門者が増えていきました。入門者が増えると、手伝いといえ大内さんの仕事も増えます。会社では総合職。仕事との両立は大変だったといえます。結婚後もそれは続きました。「会社の仕事が忙しい時でも、いずれは母の跡を継ぐ」という意識がありましたから、土・日は欠かさずお稽古。出産後も一ヶ月しか休みませんでした。子どもが一歳半を過ぎてから本格的に復帰しました」

教室の生徒(弟子)が二百名を超えた今、高齢者の仲間入りをした母親のことを考えると、大内さんも早く母のレベルに達する必要性を痛感しています。

「女性にとつて、お稽古は単なる楽しみというだけではなく自分への投資であり、一つの挑戦だと思えますね。やがてはこの道でも自立できるようにという目標があれば、人生が少々つらく思えるような時にも、『私にはもう一つ生きる道がある』という心の支えにもなります。フラは私にとつて、心のサプリメントでもあるんです」

語り終えると、いそいそと稽古の支度を始める大内さんでした。



定年過ぎて能面打ちへ。挑戦して知ったその奥深さ。

## 出来映えに心が躍る

佐伯佳道さん(六三歳)の父親は裁判官、弁護士として活躍した法律家ですが、傍ら能楽師でもありました。兄弟が謡や狂言、笛や鼓を学ぶ中で、幼い佐伯さんはサボり続けてきました。

「三年前、定年を迎えたときに、かつての『能楽家族』のはしくれとして能面打ちに挑戦しようと決めました」

しかし独学はムリ。自宅から二時間半もかかる町の教室に入門しました。

初めに作ったのは小面(若い女性の能面)。型紙に沿ってのこぎりで顔の輪郭を作り、のみで角をそぎ、かまぼこ型に。次に先生の作品と写真を見ながら彫刻刀で荒削りに鼻口、目を作る。さらに型紙に合わせて、丸のみ



## 誰もが果敢に挑戦する社会に

中野 不二男



もう二十年前にも前になります。私が尊敬する方が、ある研究所の所長を退所するときに講演で話した言葉を今でも覚えています。

「研究所は安定したらおしまいだ」

自分は研究所を去るが、研究者たちは、安定志向、現状維持を戒め、常に新しいことに挑戦してほしい。そうでなければ、研究所の発展はないという思いが込められた言葉でした。

取材者として聞いていた私は深い感動を覚えました。今思い返しても、科学技術研究の本質を突いた名言だと思います。私は仕事柄、これまでさまざまな研究機関などを回り、研究者たちの挑戦する姿勢に圧倒されてきましたが、そのような姿勢こそが、日本の科学技術を支えているのだと、痛感しています。

挑戦の大事さは、科学技術に限定される話ではありません。あらゆる分野で誰もが果敢に挑戦する社会になればと思います。

もちろん、挑戦には、失敗のリスクが伴

## 挑戦について語る②

います。失敗が怖いという理由から、挑戦できない人もいます。しかし、逆説的な言い方ですが、成功者は過去に何度も失敗しているものです。失敗しても挑戦し続ける人が成功をつかむ。失敗が怖く、紹介した言葉どおり、「安定」や現状維持で満足していたら、成功をつかめない。これが真実だと思います。

実は、私自身も、五十歳を過ぎてからある大きな挑戦をしました。ジャーナリストとしてだけではなく、より深く科学技術、航空宇宙の分野を研究したいと、博士論文の執筆を試み、五年半かけて、学位を取得したのです。実際、日々の仕事をこなしながらの研究・執筆だったため、大きな苦勞がありました。挑戦の成果を得て、大きな自信を得ました。

当然ですが、挑戦者たちは皆、挑戦すべき独自のテーマを持っています。これをやりたい。こうしたいという強い意志があります。他人と競争するわけではなく、誰に指示されるわけではなく、自らを律し、計画を立案し、目標に向かって突き進む。挑戦の面白さもそこにあるのだと思います。(談)

●なかのふじお ●ノンフィクション作家。一九五〇年生まれ。「カウラの突撃ラップ」「レーザー・メスー神の指先」「科学技術はなぜ失敗するのか」など、科学技術を中心に執筆活動を展開。

## 挑戦。それは、前を向いて歩んでいくだけ。

若者から定年を迎えた人まで、年齢も職業も、挑戦の形もさまざまです。

しかし例外なく言えるのは、挑戦することが生活の張り合いであり、生きがいに通じているということです。壁に突き当たつたらじつくりと考えればいいし、失敗したらやり直せばいい。そこで得られるのは、間違いなく前に向かって歩んでいる実感です。

挑戦するテーマを持つことは、人々の生活を豊かにするものといつてよいでしょう。生活の中での挑戦。それは特別な難しいことではなく、プロセスを楽しみながら少しずつ前に向かって進むことから始められるのです。

私たちも何か、これはというテーマに挑戦してみませんか。